学生からの報告/Students' Report

教育格差の暴力性：日米の比較から見える構造と課題/Violence in Educational Inequality: Structure and Challenges Seen in Comparison of Japan and the U.S.

学生1

今回の合同授業で、私たちのグループは「教育格差に潜む暴力」というテーマを取り扱った。このテーマに関心を持ったきっかけは、私自身が学歴というものに強いコンプレックスを持っていたことや、大学で教育科学を学ぶうちに、教育の格差は経済格差を生み出し、階層構造を同じ形で再生産し固定するという目に見えない暴力性を孕んでいるのではないかと感じたことであった。そのため我々のグループでは、まず教育格差の構造について一般的な形態について調査したのち、アメリカと日本の教育格差の特徴的な構造についてそれぞれの国の歴史的背景にも着目しながら調査した。私は主に、一般的な教育格差の構造についてと、日本の教育格差の特徴について調査した。一般的な教育格差の構造については、宮島喬による「文化的再生産の社会学」を参照した。そこでは、学校教育は社会の中で地位獲得に必要な文化情報の伝達が行われる場であり、そしてその際に学ばれる「普遍的」文化モデルは上層階の社会集団と強い親和性を持つものであるということが述べられていた。上層階級の子弟にとって社会規範が有利な状況にある上に、行為者は階層・家族・社会関係により決定されながら、自らの行為によってもその条件をさらに交換し競争過程に参入する必要があるのだが、その際に、この所与の条件にはその後も学ぶことを可能にする先有性向も含まれるため、第一次教育にいかに投資することができるかということが階層決定において重要になる。また、学校において、上層階級の子供は自立性に向けたソフトな訓練が行われるのに対して、下層階級の子弟は「上から」の規律を中心とした社会化を被る。これに加え、下層階級子弟が多い財政援助の乏しい学校と上層階級子弟の豊かでゆとりある学校という差異がこのような傾向を一層強化する。そのため、高等教育に進むにつれ、上層階級子弟の経験するパターンが学校文化に適合的であるため進学者が多くなる。この上層階級の子弟が自分達に有利なように「学力」や「優秀さ」を定義する力を持つため、この構造が再生産され続ける、というシステムの存在が明らかにされていた。また、日本の教育システムの特徴に関しては「知識伝達の構造―教育社会学の展開―」（天童睦子編）や「新学歴社会と日本」（和田秀樹）などの文献を参照した。日本は、明治期に旧来の身分制度の解体のために学校制度が導入されたため、学校での業績が新しい階層の基準となったという歴史的背景を持つ。他の国々と比較して、大学入試が公平な試験として受け入れられるメリトクラシー的な側面が強い。そして、そのような性格を持つようになった教育は、労働市場における最低コストの訓練費用で済ませるためのスクリーニング装置としての役割を果たすようにもなった。つまり、学歴が就職に大きな影響を与えるということである。そして、日本の教育システムの最大の特徴として、トーナメント方式が挙げられる。この方式の中では受験の勝者はそれ以降も競争を続けることを許され、上位トラックにとどまるが、敗者は以降の上位トラックの競走に参加する権利がなくなる。そしてこのトーナメントが小学生にまで低年齢化することで初期投資の重要性が一層増し、家庭の階級とその後の子弟の階級の関連が強くなる。2000 年代の「格差論」の広がりにより、こうした傾向が批判され、新しく、意欲やコミュニケーション能力、主体性、問題発見能

力のような「人間力」が重視されるような風潮が広まっている。しかしながら、「人間力」というのは学力以上に家庭などによる経験に対する文化投資の過多によって決定されるものであり、より一層、家庭の階級とその子弟の階級の結びつきを大きくし、格差の再生産につなげているということがわかった。今回の文献調査を行ったことで、社会に潜む学歴の規範としての存在をより鮮明な形で描くことができるようになった。このような規範は無意識化されているために、固定化された格差の解消に重要な点であるにもかかわらず問題として表に挙げられず解決策が講じられづらい。そのため、私は、今後社会学を学ぶ中で、無意識化された規範をどうすれば、問題として取り上げ、新しいものとすり替えることができるのかということを考えていきたい。

今回の授業はヴァッサー大学の学生さんとの共同授業であり、私のチームは私とヴァッサーの二人の学生のチームであった。3 人のチームということで、ただでさえ直接会う機会がなく意思の一致が取りにくい中で、全員の意識を統一するのが最も困難だった。この点においては、Zoom での会議でそれぞれのタスクの期限をあらかじめ決定したのち、Google document や Canva のようなオンラインで共同作業できるツールを最大限活用することで互いの意見や調査内容のすり合わせを行い、作業進度の共有を行うことで解決を図り、実際この試みはうまくいった。

今回の授業では、最後にプレゼンを作る必要性からも、データを用いて視覚的にも問題点を訴えるということを重視した。その中で様々な参照した文献とは別に、それらの議論についてより説得力を持たせるための数量データを収集しプレゼンに組み込むことができ、より納得感のあるものにできたと思う。一方、課題としては、英語で行う初めての学問を扱うプレゼンだったということもあり、伝えたいことに対する英語の分量の感覚が掴めておらず、内容を詰め込みすぎたために、英語の分量が多くなり、結果的に削らなければいけない部分が生じてしまったことが挙げられる。より簡潔な英語での表現や、英語によるプレゼンを何回もこなすことで英語の文章の量感覚を養おうと思った。

今回の授業では、ヴァッサー大学の学生の方々と、共同作業以外にも丘先生による特別講義を受講することができたり、プレゼンの質疑応答の時間で様々な意見を交換することができたりした。これらを通して異なる社会環境で育った人々が同じ話題についてどのような感じ方をするのかということを、新たに知ることができたり、自分や他人が取り上げた問題が相手の社会でどのように見做されているのかということをしることができたりする、という貴重な経験となった。しかし、ヴァッサーの学生との顔合わせの時に全員と対話することができず、ヴァッサーの学生がどのようなことに課題意識を持っているのか知ることができなかったという点は少し残念だと感じた。

[Summary in English]

In this joint class, our group tackled the theme of “violence lurking in educational disparity.” The interest stemmed from my personal complex regarding academic background and the realization during university studies that educational disparity not only creates economic gaps but also perpetuates social hierarchies. We investigated

the general structure of educational disparity and specific characteristics in the US and Japan, focusing on historical backgrounds. I primarily researched the general structure and distinctive features of educational disparity in Japan. The investigation revealed how education perpetuates social hierarchies and class divisions. Our collaboration with Vassar University students faced challenges in aligning schedules and language barriers. However, utilizing online tools and setting clear deadlines facilitated collaboration. We emphasized visual presentations using data to enhance persuasion. Although there were challenges, the experience of collaborating with students from different backgrounds and learning about their perspectives was invaluable. Nonetheless, the inability to engage in dialogue with all Vassar students was a missed opportunity.

難民とLGBTQ：異文化対話から見る理解と挑戦/Refugees and LGBTQ: Understanding and Challenges from Cross-Cultural Dialogue

学生2

私の発表テーマは「難民と LGBTQ」であった。私は自分自身のこれまでの体験や大学で受講した複数の授業から、元々国内でのジェンダーに関する社会規範、社会構造、さらにそこから派生する問題に関心を持っていた。そこで世界のジェンダー問題についても目を向けて調べていく中で、地域、国、個人によってジェンダー問題に対する理解や見方には大きな差があり、これを原因として迫害、差別から逃れるために難民となって国境を超えて移動する人々の存在を知った。母国で弱い存在となり難民となってしまう人々は逃げた先の国で何を必要としているのか、日本のようにこのような難民を受け入れるべき立場の国の問題点は何なのか、という疑問を抱き、このテーマについて調べ発表、議論を行うことに決めた。今回の発表では、まずどのような国で LGBT 難民が発生するのか、その原因となる法や社会の状況、LGBT 難民の個別の事例を調べた。そして受け入れ国として日本やアメリカが難民全体に対してとっている政策、さらに国内の LGBT 難民に対してはどのような見方があるのかということを調べた。加えて、これまでの日本とアメリカの LGBT に対する政策や人々の見方がどう変化してきたのか、その歴史についても調べることで、現在の状況の問題点や解決法についても考察した。今後は、アメリカや日本など受け入れ国の問題点に加えて、LGBT 難民送り出し国の歴史や、人々の意識、政策の問題点についても理解を深め、双方の立場から、性別関係なくすべての人々に平等な人権保護を行うためには何が求められるのか、この問題を今よりも可視化するには何が必要であるのか、ということを考えていきたい。さらに私はこれから大学在学中に交換留学をする予定であるので、今回のヴァッサーの学生との対話のような、留学先での異なる価値観を持つ人々との対話を通して、この問題に対する視野をより広げ、私たち若者には何ができるのかということを考えていきたいと考えている。

ヴァッサー大学の学生との協働活動について難しいと思った点は、言語の違いが原因で自分の思うことを完璧に伝えることができないということである。例えば自分が発表の中で扱いたい内容について、相手に英語を使って説明しても、相手は自分が思っていたものとは異なる解釈をしていたということがあった。これは逆の立場でも起こった。相手が考えや感情を日本語で説明しても、日本人の私がその言葉の意味や細かいニュアンスを理解できない、ということがあったのだ。相手の言語に合わせて必死に説明したとしても、やはりネイティブスピーカーと同じ表現を使いこなすことはできず、異なる言語を使う人に対して自分の考えを正確に伝えることの難しさを実感した。この状況に対して、私たちは日本語と英語を織り交ぜながら理解するまで説明するという対応をした。英語で説明して理解してもらえなかったら日本語で説明したり、具体例や画像を示しながら説明したりすることは、より正確な理解に繋がった。日本人である私自身も、相手が日本語で説明する時よりも、英語で説明する時の方が理解が深まることがあり、言語により伝わるニュアンスの違い、理解の難しさを体験した。

本授業により獲得できたと思う能力として、日本語を学習途中の方と日本語で対話する際の能力

を挙げる。日常の中で海外の方と会話する際には英語を用いることがほとんどであるため、自分の母語（日本語）を学習している方と長い間日本語を使って会話する機会はあまりない。よって最初は、学習途中の方にとっては難しすぎてわかりにくい言葉をたくさん使ってしまったり、どう話せば良いのかわからなくなってしまったりしたことがあったが、会話を重ねていくにつれて、相手のペースに合わせて話を進めること、そして「日本語」という言語の意識をもちすぎないことの重要性に気づいた。反対に課題であると思うのは自分の明確な意見を持ってその理由も含めて具体的にはっきりと述べる能力である。ヴァッサーの学生と協働での発表準備や議論を通して、何度も「なぜ」や「あなたはどう思うか」という言葉を投げかけられた。これまでは自分の考えの理由を考えたことがなく、今回の授業の中で「なぜ君はそう思うのか。」という言葉を何度も受けて、「そういわれてみれば、なぜ自分はこう考えているのか。」と自分自身について振り返り、考え直すきっかけにもなった。さらに、ある問題に対して「あなたはどう思うか」と聞かれて明確に答えられないことが何度かあり、自分の意見を持ってそれを言語化し、相手と共有できないことにもどかしさを覚えた。今後は、なぜ自分がその問題に対して興味関心を抱き、どのような理由で自分はどのような意見を持つのか、というように具体的にはっきりと自分の意見を述べられるように、問題を知り、また自分についても振り返り深く分析していきたい。

本授業でよかったと思うところは一対一または一対二、といった少ない割合でアメリカの学生、日本の学生との発表チームが組まれていたことである。普段の大学の授業などでは海外学生との交流はほとんどなく、あったとしても授業の人数が多く、密に議論を行なったり学術的な話題について意見を述べ合ったりする機会はない。今回の授業は少人数で、後期の授業期間ヴァッサーの一人の学生だけと話し合いを重ねたことにより、深い関係を築きながら発表に向けた意見交換や準備を行うことができた。授業を通して、遠い地に住む、年齢も学ぶことも全く異なる学生とズームで話し、意見交換する貴重な機会を得ることができてよかった。反対に改善の余地があると思うところは、ペアになった生徒以外の他の生徒との意見交換の場がほとんどなかったことである。プレゼン発表の場での Q&A セッションで意見交換する場はあったが、それ以前にはなかった。発表に向けた準備の段階で、アメリカの学生に限らず日本人の学生も含め複数人での議論の場があれば、多様な考えを踏まえて、発表の内容がより濃くなったのではないかと考える。

[Summary in English]

My presentation focused on "Refugees and LGBTQ." It stemmed from my experiences and coursework on gender norms, social structures, and related issues. Exploring gender issues globally, I discovered disparities in understanding and treatment across regions, leading to persecution and displacement of LGBTQ individuals as refugees. I investigated policies and societal perspectives in Japan and the US towards LGBTQ refugees, alongside historical shifts in policies and attitudes. I aim to deepen my understanding of both host and origin countries' perspectives to advocate for equal rights

globally. Challenges in collaboration included language barriers, but we mitigated this by explaining concepts in both languages. This experience enhanced my Japanese conversational skills and highlighted the importance of clarity in expressing opinions. Collaborating in small groups with Vassar students provided unique insights, although more opportunities for interaction among all students could have enriched discussions further.

国際的協働における挑戦と成長：言語の壁を超えて/Challenges and Growth in International Collaboration: Beyond Language Barriers

学生3

発表テーマについて問題意識を持ったきっかけは、以前に受けた別の授業で関連する内容を少し学んだことである。また、日本ではテーマに深く関わる法律が最近改正されたのだが、いくつもの問題点があり議論を呼んでいたので、このフォーラムで取り上げアメリカの現状やアメリカの学生の意見も聞きたいと考えた。今回の発表では、この法律の一つの項目に絞って、どのように改正されたのか、それがなぜ「暴力」と言えるのか等を調べた。これ以外にも日常生活における事例や過去の事例を調べた。そして「暴力」と一言に言っても、物理的なものから精神的で目に見えないものまで様々な形があり、発表テーマにはそういった外的な暴力と内的な能力のどちらも含まれている。テーマを決めた際はどちらも扱う予定だったのだが。フォーラムの最後のお話にもあったように、内的な暴力に偏ってしまったため、外的ないわゆる「暴力」という観点からもこの問題を考えていきたい。今回、日本とアメリカどちらにも法や政策の改善が必要であることがわかったので、政治に関心をもち、選挙などを通じて問題の解決につながるような方針、考え方をもつ政治家を支持していくことが、私たちにもできることの一つであると考える。特に若者の政治への関心が低く、投票率が低い日本では有効である。また、発表のために調べたことを身近な人に知ってもらったり、話し合ったりして、より多くの人に問題意識を持ってもらい議論の輪を広げていきたいと思う。

第一に、ヴァッサー学生とは活動時間帯や休暇、試験の期間がずれており、同時に作業を進めるという時間を十分に設けられなかった点が難しかった。これを乗り越えるために、Google ドキュメントなどを共有して、進捗情報を互いに確認したり、コメントを残したりできるようにした。発表の分担を早めに決めて、自分の担当する部分を調べ、まとめることで作業の効率は上がったが、「協働」しているという感覚は薄れてしまった。

第二に、普段使用しない言語で発表することが難しいのはもちろんのこと、ヴァッサー学生の書いた日本語のスクリプトを添削するのも同じくらい難しかった。間違いに気付いても、それをどう直したら意味を変えずに違和感をなくせるかわからなかったり、文面だけでは何と言いたかったのかわからなかったりしたため、zoom で話し合いながらや英語で何と言おうとしたのかも教えてもらいながら添削した。また、漢字を音読みで読むのか訓読みで読むのかが紛らわしいようだったので、スクリプトにローマ字を振ったものも添削した。

まず、獲得できたと思う能力は、マジョリティの立場だけでなく、マイノリティの立場から物事を考える能力である。マイノリティに焦点を当てたテーマについて発表するため、そのマイノリティの人たちについて調べていくと、その中でも多様な人がいてそれぞれ異なった問題を抱えていることがわかった。ある機関が行ったアンケート調査やインタビューの結果も参考にしたのだが、そもそもそのような調査が行われているということを初めて知ったし、マイノリティの人たちがどのように感じているのかを少しは知ることができたと思う。また、他のグループの発表を聞くことで、様々なマイノリティについて考えさせられた。ペアのヴァッサー学生から身近な人の実体験も聞かせてもらい、フォーラ

ム内の質疑応答でも多くの人の実例を交えた意見を聞くことができた。もう一つ獲得できたと思うのは、テーマ設定の能力である。私はこれまでプレゼンやレポートの題材や構成を決めるのがあまり得意ではなかった。今回も「暴力」という漠然としたテーマから自分の発表テーマを決めるのは簡単ではなかった。さらに発表テーマを決めてもなお対象とする範囲が広すぎて短時間の発表でまとめるにはもう一段階必要だった。そこでもう少し狭めたり、発表内での用語の定義を設定したりといった工夫をすればよいと共同発表を通して学ぶことができた。
次に課題に思うところを述べる。一つの問題に対して多角的な視点で考えるという能力は期待していたほど獲得できなかった。確かに大きく見れば一つのテーマについてアメリカの学生と協働で調べ発表したが、それぞれが自国の事例を調べ前後半で分担するという構成で発表したため、個々の問題については片方の視点しか取り入れることができなかった。アメリカについて質問をされた時にも私は答えられず、完全にヴァッサーの学生に任せてしまった。そのため、もっと情報を共有しディスカッションをした上で発表の準備をするべきだったと感じている。

本授業で良かったところは学んでいる場所や言語、国籍を超えて議論、協働することができた点である。これは他の授業ではなかなか得られない経験である。また、オンライン型の授業ということで費用面での心配もなかった。留学などどちらかがもう一方の国で生活しているという状況ではなく、お互いに自国にいるからこそそれぞれの国の時事的な事例も考えることができるのは良い点である。

改善の余地があると思う点は、アメリカとの学生との連絡が各自に委ねられすぎていたことだ。SNS で連絡を取ろうとしてもなかなか既読がつかず、少し不安に思うこともあった。授業の日程や締め切りが曖昧だったことだ。変更されることもあったので、授業内で示すだけでなく Moodle 上に全スケジュールを上げておくといつでも確認できてよかったと考える。その際には授業のない日もないということを示しておくとより分かりやすくなると思う。また、これは私自身の積極性が足りなかったという部分も大きいのだが、フォーラムの質疑応答の時間に Zoom で参加している学生が連続で挙手をすると、対面で参加している学生が議論に参加しにくいと感じた。

[Summary in English]

The presentation topic was inspired by a previous class and recent legal changes in Japan, leading to discussions in the forum with American students. It focused on analyzing these amendments, particularly regarding their classification as "violence," and explored both legal and real-life examples. While the emphasis was on internal violence, the aim is to address external violence too. Recognizing the need for policy improvements, especially in youth political engagement, supporting advocating politicians is deemed essential. Challenges included coordinating schedules and editing scripts in unfamiliar languages, but skills acquired include considering minority perspectives and refining presentation topics. However, there's room for improvement in

approaching problems from multiple angles and enhancing communication among students from different backgrounds. Positive aspects included cross-cultural collaboration and discussing issues beyond geographical and linguistic boundaries. Yet, better organization in communication between American and Japanese students is suggested for future collaborations. Overall, while the experience was insightful, improvements in communication and collaboration across borders are needed.

家族構成からみる制度的性差別：国際比較と社会進歩の展望/ Institutional Sex Discrimination in terms of Family Structure: International Comparison and Prospects for Social Progress

学生4

ヴァッサー大学の学生との共同発表では、家族構成からみる制度的性差別を研究しました。テーマの選択の背景には、日本で女性として暮らす中で身近に感じる違和感が指摘できます。女性の体を扱う様々な広告、政治家・TV 番組等でのタレントの発言、性的同意年齢が極めて低いのに対し、不十分な性教育など、「性別に基づく暴力」を可能にしてきた政策、慣行、規範はしばしば見過ごされ、長らく社会に根付いています。このような制度的性差別は内面化され、循環するとても身近な暴力であると考えました。グループでのディスカッションを通じてトピックを絞り、日本、アメリカ、ブラジルの比較を通して家庭内の性差別を研究することにしました。中でも、私は日本の視点を提供することになりました。

本授業で研究を進めたところ、日本では、性別役割分担と雇用形態が家族構成に深く影響していることが分かりました。雇用動向は、女性の役割が正規から非正規へと移行しており、共働き世帯の減少につながっています。これは、女性が子育てのために一時的に仕事を離れ、その後復帰するという一般的なパターンを維持し、長期にわたって働く女性の数が「M」字型の曲線を作り出しています。

日本の家庭では、家事と育児の分担は伝統的な性別役割分担に著しく依存しており、これらの責任の大部分は女性にあります。このような不公平な分業は、「家事性」と呼ばれる 3 つの暗黙のルールに基づく考え方から生まれていました。それらは、雇用主は従業員が常に手の空いている「理想的な労働者」であることを期待し、男性はこの期待に応えることになっており、子どもは片方の親（通常は母親）が働かずにフルタイムで面倒を見るべきだという考え方です。このような習慣は、性別特有の役割を強化するものであり、人々は性別にふさわしい仕事をすることで評価される文化に縛られる状況を構築しています。

以上の現象が、国内の出生率に大きな影響を与えていることも分かりました。経済的な問題は、より多くの子どもを望む夫婦にとって大きな障壁となっており、これはさらに、男性は仕事に専念すべきであるという社会的期待によって悪化し、家庭や育児をほとんどしないことにつながっています。その結果、1970 年代に 2.13 前後で安定していた合計特殊出生率は、2005 年には 1.26 という歴史的低水準に達しています。この出生率の低下により、男性の育児参加を促す取り組みが行われるようになったものの、男性の介護の役割を促進することよりも、政府は労働者と介護者としての女性の二重の役割を支援することに重点を置いていました。性別による規範等が、男性の育児休暇取得率の低さに直接影響していることも、出生率の低下につながっていると指摘できます。

最後に、過去 10 年間にわたる日本社会における性別役割分担に関する意識の変化についても簡潔に調査を行いました。その結果、特に 2012 年以降、「男性は職業に就き、女性は家庭を守る」という性別に基づく役割分担を重んじる伝統的な観念が徐々に衰退し、より進歩的な視点を持つ男女が増加していることが明らかになりました。しかし、この一般的な傾向にも関わらず、男性は

女性に比べて伝統的な性別役割に固執する傾向が依然として強いことが示されました。これは、性別役割分担に対するより進歩的な視野へのシフトが観察されるものの、女性が男性よりもこの種の変化に対してより寛容であることを示唆しています。

また、「イクメン」という語彙が 2005 年頃から使用され始め、育児に積極的に関与する父親を指す言葉として社会に定着し、2010 年には流行語大賞に選出されるなど、ムーブメントとしての浸透が見られました。しかしながら、このような特定の語彙が必要とされる現象は、母親に対してはそのような役割が自然に期待され、特別な言葉を必要としないのに対し、父親の育児参加がまだ充分に社会に受け入れられていないことを示唆しています。この事実は、父親による育児への関与を促進するための社会的認識の変化が必要であることを強調しています。

ヴァッサーの学生との調査を比較すると、伝統的な家族構造が支配的な日本、アメリカ、ブラジルの各国においても、社会の進歩が徐々に認められる一方で、各国間には顕著な差異が存在していました。日本とアメリカはともにキャリアを重視する文化を持つ点で共通していますが、日本は礼儀と対立の回避を文化的価値として大切にしているのに対し、アメリカは個人主義を強く重んじる傾向にあります。この文化的背景の違いから、アメリカでは家族構造の多様性が進展する傾向にあることが指摘されます。一方、ブラジルでは家族を中心とした価値観が強く、女性のキャリア形成に対する期待が低い傾向にありますが、幼児期の育児に対する政府の支援が存在する点が特徴です。これらの観察から、家族構造と社会進歩に関する国際的な比較研究において、文化的背景や政策の差異が重要な役割を果たしていることが明らかになります。

本授業での研究を通して、育児、家事、介護といったケア活動が、私たちの生活において合理性や効率性だけでなく、重要な要素であると認識しました。これらは、人間関係と共存を尊重する社会を構想するための基盤となり得ます。性別や職業に囚われないケア活動の普遍的な価値を認め、これを全ての人々の重要なライフステージとして捉える視点が必要です。そのためには、性別役割分担に基づく既存の枠組みを解体し、再考することが不可欠です。これらの視点から、ケア活動の社会的な価値と潜在力に関して、今後も深い考察を重ねていきたいと考えています。

本研究のグループ活動では、学校のスケジュールの違いや休暇期間などにより、授業を通したメンバー間でコミュニケーションをとる機会が限られていました。したがって、WhatsApp や ZOOM などのデジタルコミュニケーションツールを活用し、授業外でディスカッションや添削作業を行うことにしました。これらの取り組みにより、グループメンバーは時間や地理的な制約に縛られず、効率的に情報交換を行うことができたと思います。最終的に、各メンバーが異なる国の調査を担当することで、それぞれの国に関する深い理解と豊富な情報を集約した発表を行うことができました。

本授業は、さまざまな社会現象に内包される暴力を認識する貴重な機会となりました。特に、特別講義では、原爆による被害を事例とした暴力のレトリックと隠蔽について学ぶことができました。私が 20 代の日本人女性として、原爆の描写やその結果、そしてそれに関連する論点について深く掘り下げる学術的なイベントに参加したのは、これが初めての経験でした。私たちは毎年、原爆の犠牲者を追悼しますが、その行為が本当に「記憶」として機能しているのか、私には疑問です。過去の悲劇は、私たちの記憶に深く刻まれ、未来を守るための警鐘となるべきですが、講義後、これ

が今では年間行事として形式的に扱われてしまっているようにも思えました。また、意図的であれ無意識であれ、つらい歴史から目を背け、教育機関での議論が不足している現状に直面しているように感じます。私自身、21 年間の生活の中で、この過去にほとんど触れることがありませんでした。これは、私が心の痛む歴史について学ぶことを無意識に自己検閲してきた表れだと思います。

この暴力の隠蔽は、アメリカの教育における日本人としての経験にも反映しています。例えば、授業で原爆について述べたいと思った際、先生はその意見を表現する機会を意図的に与えてくれませんでした。私の母がアメリカの大学に通っていた時、原爆が多くの人々にとって正当化されているという視点に触れたことが、この問題の複雑さを物語っています。

特別講義では、歴史の暗部に直面し、それに関して公に議論することの本質的な重要性を学びました。また、その過程で提案される解決策が、意図せずしてその出来事の本質を隠蔽する可能性があるという危険性についても認識しました。特に、歴史の中の痛みや苦悩を公然と認め、それについて学ぶことは、未来をより良くするための基盤を築く上で不可欠です。しかし、その過程で、歴史の真実を歪めたり、不都合な事実を覆い隠すような解決策を提案することは、結果として真実から目を背けることに他ならないという認識が深まりました。このような学術的な場での議論は、私たちが過去の出来事にどのように向き合い、それをどのように記憶し続けるか、また、それらの出来事が現在および未来にどのような影響を与えるかを理解する上で極めて重要だと思います。

本授業は、自由度が高く、「暴力」というテーマを軸に、学生一人ひとりが自身の関心や興味を深めるための時間が確保されていました。そして、個人の知識の蓄積に留まらず、他の学生との知識の共有や共同作業へと発展させられたのは興味深かったです。一方で、不定期なスケジュールにより、週ごとに持続的な学習プロセスを経ることが難しく、継続的な思考の発展や調査が難しかったです。より一環とした授業のスケジュールが整っていれば、より有意義な時間を過ごせたと思います。

[Summary in English]

The collaborative presentation with Vassar University students examined institutional gender discrimination within family structures, prompted by personal discomfort as a woman living in Japan where such issues are ingrained. Research focused on comparing gender dynamics in Japan, the US, and Brazil, highlighting Japan's declining dual-income households and traditional gender roles. Despite societal progress, traditional norms persist, with men more attached to traditional roles. Comparisons with Vassar students revealed cultural and policy differences, emphasizing the need to dismantle existing gender norms. The class facilitated exploration of various forms of violence in social phenomena but faced challenges in maintaining consistent learning due to irregular schedules. A more structured

schedule would have enhanced the learning experience, despite the valuable knowledge sharing and collaboration among students.

同調圧力に対する問題意識と今後の展望/ Awareness of the problem of peer pressure and prospects

学生5

暴力を考えていくにあたって、私は「同調圧力」を発表テーマに提示しました。理由としては、加害者・被害者を含め、周囲が気付きにくく、無意識のうちに被害が悪化する可能性がある暴力だと考えたからです。というのも、高校生の頃、倫理の授業でハンナ・アーレントの「悪の凡庸さ」という概念を習い、周囲の当たり前によって生み出される常識化というものの恐ろしさを知りました。彼女はナチス・ドイツの責任者の裁判を通して、この概念を引き出しました。「みんながしているから」「命令だったから当たり前だ」。そのような「同調圧力」は人の理性を狂わせるのだと思います。自己の中に存在するはずの正義でさえも塗り替えられてしまうのです。だからこそ、私は「同調圧力」を通して、今この時の常識を見つめ直し、クリティカルな視点を身につけていきたいと考えました。

それこそ発表テーマを決める入り口は戦争の話でしたが、ヴァッサー大学の方とチームを組む中で、「学校」という身近なものを提示する方が、より深く、かつ自分事として、聞く側も考えられるようになるのではないかという意見があり、「学校での同調圧力」へとテーマの幅を絞りました。実際に準備期間では、日本とアメリカ、双方の「同調圧力」を、英語と日本語で調べ、「同調圧力」そのものがなぜ存在し、国によってどう違うのかを調べ、学内/受験/不登校の観点から導き出しました。同調圧力の原因となっていたものやその利点や問題点、歴史・影響という今まで知らなかった「同調圧力」のリアルに触れることができました。

今後、私は「同調圧力」という観点と、他者との関わりの中で関わっていきたいと考えています。この世の中、「同調圧力」は一種の常識として取り扱われ、その型から外れてしまうと「常識のない」ものとして受け取られてしまっていると感じています。例えば、発表後の Q and A で出た「就職活動におけるスーツや黒染め（統一化）」に対する観点は、まさにそのことを指摘しているのだと思います。「同調圧力」および「常識」が、人を個人として個性を発揮することに対する恐怖を生み出しているのかも知れません。私自身、その恐怖は持ち合わせていますが、生きていく中で、そのような恐怖を他者に与えないようにしていきたいと思いました。誰かの「こう生きたい」という思いを、「同調圧力」で押さえ込まないように、集団としてではなく、個人として、他者と向き合っていきたいです。

ヴァッサーの学生と協働活動していく中で、難しいと感じた点は意見のすり合わせや仕事の分担でした。それこそチームメイトの方はとても優しい方で、英語日本語のバイリンガルの方でもあったので、意見の衝突やコミュニケーションにおいての困難はありませんでした。しかし、やはり第一言語がお互い違い、育った国が違うのは確かで、その中でお互い伝えられていたと思っていたことがうまく伝わっていなかったことや、内容が難しいのもあり、お互いの方向性を共有し合うことが難しかったです。

それを乗り越えていった方法としては、とてもシンプルではありますが、「沢山話すこと」でした。毎週のように 1 時間、時に 2 時間近く話し合い、見つけた記事や論文、それに対する意見を共有し合いました。その中でお互い、「同調圧力」にどのような意識を持っているのかを汲み取り合いま

した。自己の中で常識化してしまっていた概念の、国・環境という観点からの見つめ直しにもなりました。パワーポイントという形におこすまで、確かに時間がかかりましたが、それはそれで、とてもやりがいのある日々でした。

本授業の中で、私は「日常の中で常識を見つめ直す力」の必要性に気づくことができたと思います。それは「同調圧力」というテーマを通してでもありますが、国境を越えた交流をしたからこそのものだとも感じています。育ってきた環境が違えば、知っていることや知らないことも違います。そして、国が違えば、それはさらに顕著に現れるのではないかと今回思いました。お互いがお互いの国の同調圧力を調べていく中で、「私はこういうイメージがあるのだけれど実際はどうなのか？」と質問し合うと、「いや、実際はそこまでではない」ということも多々ありました。自分自身の中に常識化してしまっていること、ステレオタイプ、それらに気付かされました。

これから自分自身の中で課題（目標）となるのは、何が正しい正しくないという自己の視点で物事を判断するのではなく、自分の中で浸透してしまっている常識に気づくこと、そしてそれを客観的に捉えることのできるように自ら交流にぶつかっていくことにあると思います。自分の中で何が常識化してしまったかというのは自分で気づくことができないからこそ、他者との関わりを大切にしていきたいです。

この授業で良かったこととしては、国境を超えて身の回りの問題を考えることができたという点、生徒主体で進めていく授業であったという点であると思います。今までの大学生活の中で、同大学の生徒や他大学の生徒とのディスカッションの機会はありましたが、他国も一緒になって一つのことを考え、発表という形にしたことはありませんでした。だからこそ、国際交流論に参加して、国を超えて交流することの難しさ、そしてその先にある達成感や面白さを実感することができました。また、暴力という大きなテーマの中で、何を取り扱うのか、ペアとどのように時間を合わせながら準備を進めていくかなど、ほとんどが生徒自身の判断で行われたからこそ、より濃い経験・交流をすることができたと思います。

改善の余地があると思うところとしては、授業の期間です。今回は後期、つまり半期計画の授業でしたが、半期ではなく 1 年を通して行えたら、さらに交流を深められるのではないかと思いました。というのも、私自身「この方とお話ししてみたいな」という方が沢山いて、半期の授業内では、それを実現するのがなかなか難しいと感じたからです。一回の発表ではなく、何回かペアを変えながら発表をしたり、交流をしたりしても、面白いかなと感じました。

[Summary in English]

The presentation theme on "peer pressure" was chosen to explore a form of violence often unnoticed by both perpetrators and victims. This concept was inspired by Hannah Arendt's "banality of evil," revealing how societal norms can normalize harmful behaviors. The focus shifted to "peer pressure in schools" through collaboration with Vassar students, allowing for a deeper and more relatable

exploration. Researching peer pressure in Japan and the USA revealed its various aspects and impacts. The goal is to continue examining peer pressure and promoting individuality while embracing diversity. Challenges in collaboration were overcome through extensive communication. The course highlighted the importance of reassessing norms and the value of international exchange. Extending the course duration could enhance exchanges and presentations further.

フォーラムのテーマからの発想：暴力に対する問題意識と国際協力/ Ideas from the Forum's theme: Problematic awareness of violence and international cooperation

学生6

今回のフォーラムのテーマ「暴力」を聞いて初めに思いついたのが私たちの発表テーマだった。このテーマは、新型コロナウイルスの流行で発生し、ニュースで目にする機会があったことや、留学生との交流の中でみつけた日本の「暴力」に気が付いていなかったこと、身近にある問題に気が付いていないのではないかという思いから問題意識を持った。また、このテーマによってヴァッサー学生との違う文化や考え方を活かしたディスカッションができ、加えて今までは知らなかった、もしくは気づいていなかった自国の問題について改めて知ることができると考えた。

発表はアメリカと日本の比較を中心に行いたかったため、まず日本の現状をアンケート結果や厚生労働省をはじめとする公的機関のウェブページを利用して調べ、アメリカについて同様に調べてもらったペアのヴァッサー学生との共有・ディスカッションを経て、共通点や相違点がみられた点についてさらに詳しく調べた。この発表を通して、自国の現状にも知らない点がたくさんあることに気づき、またその問題が他国と比べて対策が進んでいなかったり、問題意識がうすかったりしていることを知った。他国との比較によって自国の現状を改めて知り、対策の方法や国民の意識などの観点でアイデアを得て反映していくべきだと感じた。今後は、今まで以上に身近にある問題に目を向け、同じ問題が改善に進んでいる国の政策や意識、対策を調べ SNS での発信などを通してまずは自分を含めた周りから問題意識を高め、改善に向かうように促していきたい。

ヴァッサー学生との協働においてお互いの言語を学んでいるとはいえ、どちらの言語で話していても、伝えたいことをそのまま受け取ってもらうこと、受け取ることは難しかった。互いのスクリプトを添削する際に相手が伝えたいニュアンスを崩さずに自然な言葉に直すには互いに確認しながら添削を行う必要があった。この問題は両方の言語で確認することや、相手の言いたいことを受け取れているかを直接確認することで解決することができた。

また、時差も大きいため、発表準備ミーティングの予定を立てるのも難しかった。どちらかが朝早く、もしくは夜遅くにミーティングをしなければならないため、スケジュールを共有して、無理のない範囲で予定を立てたが、直前になって予定が変わってしまうこともあった。私たちは、どちらかの大学が休みの期間を利用してミーティングを行うことでうまく予定を合わせることができた。

発表のためのスライドやスクリプトを作成するときも難しい点があった。普段の授業で行うプレゼンテーションの方法がペアの学生と異なっていて、発表の流れをすり合わせるのに話し合いが必要だった。この問題は発表の目的を踏まえたうえでお互いのやり方を取り入れながら、オーディエンスに伝わることを意識して作成することで解決できた。

授業の中で獲得できたと思う能力について、自分の主張をしっかりと相手に伝える能力が挙げられる。言語や文化が違う相手と協働することによって、意見が一致しないこともあったが、自分にとっては当たり前であっても相手にとってはそうではないことを意識するようになり、話し合いを通してすり合わせをした。相手の主張に合わせるのではなく、自分にとって正しいことをしっかりと伝えたう

えで話し合った方が深まり、全員が納得できると感じた。また、文化的な多様性に対する意識も獲得できた。文化の違いを感じられたことによって、世界には多様な文化があるという普段の生活の中ではなかなか感じられない事実を認識できる機会があった。それによって些細なことでもアメリカではどうなのかを気にするようになった。

課題に思ったことは、フォーラムを除いてオンラインでの授業だったこともあり、ディスカッションへの参加が消極的になってしまった点だ。意見や疑問を言い出せないこともあり、もっと積極的に参加するべきであったと感じている。また、発表の練習のためにミーティングをする時間が取れず、事前にスライドを動かすタイミングや相手のスクリプトをしっかりと把握しないまま発表を行ったため、うまくいかない点もあった。もう少し時間があれば、よりよい発表ができたと思う。

授業でよかったと思う点は、興味深い講演を聞くことができた点と、少人数で各自が考えた課題、テーマについてディスカッションをできた点だ。自分たちの発表テーマだけでなく、様々な「暴力」に関する考えやお話を聞くことができ、「暴力」というテーマについて幅広く考えることができた。また、同じ学生という立場でもそれぞれが違う意見を持っていることについてディスカッションを通じて知ることができ、私自身が思いつかなかったテーマに関心を持っている学生がいて、発表を聞いて新たな知見を得ることができた。

改善の余地があると思う点は学生同士の交流が少ない点だ。オンラインだったこともあり、日本人同士でさえ同じ授業をとる学生同士の交流が難しかった。授業内でディスカッションをする際も限られた時間内のみになってしまうのに加え、授業時間外の活動も対面ではなくオンラインで最小限の時間で行っていたため、テーマに関心を持っている学生がいても、話を聞く機会が得られなかった。交流が多く、対面授業であればさらにディスカッションを深めることもできたのではないかと思う。

[Summary in English]

The theme of "violence" for the forum prompted us to choose it for our presentation. We became aware of violence in Japan through the COVID-19 pandemic and interactions with international students, leading us to address this issue. Comparing Japan and the US, we researched public data and engaged in discussions with Vassar students, realizing the need for awareness and solutions to domestic issues. Challenges included language barriers and scheduling meetings due to time zone differences. Despite difficulties, we improved our ability to convey ideas effectively and gained cultural awareness. However, online classes limited participation, hindered presentation preparation, and reduced student interaction. Nonetheless, we appreciated insightful discussions and presentations on various violence-related topics. Improvements could be made in increasing student interaction, particularly in online settings where communication is limited.

暴力とメンタルヘルス:国際協力と共通の関心事/ Violence and Mental Health: International Cooperation and Common Interests

学生7

私が今回のフォーラムで発表したテーマについて問題意識を持った経緯は、まず、以前から戦争や平和の問題に興味を持っていたことがあります。これまで多くの戦争と平和に関する歴史を学んできて、多くの命を奪い、多くの人を傷つけてきたこと、そして、今後に生かそうとしてきたことが分かりました。しかしそうした過去があるにも関わらず、近頃、ウクライナやパレスチナで争いが発生してしまいました。そんな中、今回、この授業の中で暴力について取り扱うと聞いた時、戦争における暴力について、身体的な傷だけでなく、精神的な傷も重要な問題なのではないかと思い、現在起きてしまっている争いの中での精神的な傷について考えたいと思いました。特に子どもは、そうした影響を受けやすく、そしてそこで負った傷が戦争が終わった後の人生にも深く関わると考え、今回テーマを選びました。今回の発表では、ヴァッサー大学の学生さんと分担する上で、私自身は過去の事例がメインになりましたが、メンタルヘルス分野の支援にフォーカスした NGO の報告書を読み、過去から続く争いについて、子どもたちが心にどのような傷を負ってどのような状況になっているのか、それをどのようなアクションによって解決しようとしているのか、そして、それを共有した後、現在の争いの状況を踏まえ、なにが現在に活かせるのかを考えました。

ヴァッサーの学生さんとの共同活動で難しいと思った点は、時間の問題と言語の問題です。連絡手段が限られていたり、時差の関係で予定が合わなかったりして、なかなか連絡が取れませんでした。そのため、結論を先に共有し、分担をすることで、ゴールを共有しながら各自で進めることができました。しかし、なかなか話し合いの場が持てなかったので、考えを深く共有しきれなかったことは、改善点だと感じています。言語については、他のグループよりもお互い相手の言語がそこまで得意ではなかったために、かなり苦戦しました。話したとしても本当に伝わっているかが心配で zoom での話し合いを円滑に進めることが難しかったです。初めの方は心の距離もあり、探り探りの話し合いになってしまいました。しかし、打ち解けてきてからは、言語のことなど考えなくなり、日本語でも英語でもジェスチャーでも翻訳機でも、伝わればなんでもいい、という気持ちで話し合うことで、だんだんスムーズに意思疎通が図れるようになりました。この、伝える、という経験は、今後非常に役に立つと感じました。

今回の授業で得たこととして挙げられるのは、国際交流という面と、暴力というトピックについてさまざまなテーマから、アメリカと日本を見て、考えを深められたことです。私はこれまで、ここまで近い距離で国籍の異なる人と話をする経験をしたことがなかったので、アメリカの話を聞き、一緒に作業をして、国が違おうが、考えていること、好きなこと、些細な共通点は数えきれないほどあると、国という枠組みは、共同作業においてそこまで重要な要素ではないと実感できました。また、他のグループの発表を聞いて、もちろん、アメリカにいるからこその視点だなと思うことは多々ありましたが、日本、アメリカ、と関係なく、その人個人の面白い意見として受け止めて聞いている自分がいました。それぞれの背景を踏まえて、個人の意見を聞き、暴力についての考えを深めることができました。

また、自分の興味のある分野について、日本人ではない人の意見を初めて受けて、共感できないところ、できるところ、さまざまだと感じました。他の人の発表においても、新たな発見が多く、考えを深めることができました。例えば、同調圧力というテーマでは、アメリカの経験を重視した入学試験制度について、それについても経験を得られるか、という勝負になってしまうこと、遠くで発生している暴力について、自分にできることについての意見を聞いて、自分と同じところ、違うところ、と考え直すことができました。また、個性を活かせる社会にすることについて、個性が重視されることも、個性を持たなければならないという圧力につながるのではないか、自分が気づいていないだけで、至る所に同調圧力は存在している、と気がつくことができました。今回の授業でよかったところは、グループのメンバーが 2 人だったところです。もし他にメンバーがいたら、任せてしまったり、お茶大生同士で相談してしまったりと、ヴァッサー大学の学生さんとの繋がりが深くなれないまま、また自分のやるべきことも少なくなってしまったかなと思います。しかし今回 2 人だったことで、自分が進めないと、話さないと、やらないと始まらない、という状況だからこそ、得られる達成感があったと感じました。改善の余地については、連絡手段が SNS になってしまい、資料の共有など使いづらく感じることが多かったので、日米双方が使いやすい連絡手段があれば良かったと感じています。

[Summary in English]

The motivation behind my chosen theme for this forum stemmed from my longstanding interest in issues of war and peace. Despite learning about the historical context of wars and their impacts, recent conflicts in places like Ukraine and Palestine prompted me to consider not only the physical but also the psychological wounds inflicted by violence, particularly on children. Collaborating with Vassar University students, language barriers and time constraints posed challenges, but we managed by sharing conclusions upfront and dividing tasks. Despite initial difficulties, we eventually found smoother communication through frequent discussions and a shared determination to overcome language barriers. This experience highlighted the importance of international exchanges and expanded my perspective on violence. Additionally, hearing diverse opinions and presentations led to new insights and reflections on topics such as peer pressure and individuality. Having only two group members enabled a deeper connection with Vassar students and a stronger sense of personal accomplishment, although improving communication tools, particularly for document sharing, would enhance future collaborations.